

常光寺山・行場巡り

2009.04.18

東京 西原京子

赤石山脈の最南端部に常光寺山という霊山がある。今回、縁があって常光寺山行場を独自に調査研究されている中村氏の行場めぐりに同行させて頂くことになった。東京からのアプローチを考えると、はるか雲の上に位置するような奥地だが、知る人ぞ知るアカヤシオの群生地であり秘湯の湧き出る、歴史的にも貴重な聖地なのである。

09年4月18日 東名高速浜松ICから天竜川に沿って上流へと車を走らせる。天竜川は、その豊富な水量をうねらせながら、ゆったりと流れている。やがて道幅が狭くなり、水窪集落が姿を現すと修験道入口「河内浦」が近い。その、さらに奥に山姥伝説の山住神社があると言う。

浜松ICから実に2時間の道のりである。道路も車もなかった時代に、この奥地に足を運べるものは相当のツワモノだったに違いない。まさに霊場の名にふさわしい、人を寄せ付けない山域なのだ。だからこそ、気候が温暖で縄文時代から人の住んだ静岡県にあって尚、聖地として残されたのであろう。

本日の修行者は8名と柴犬のケン。まず、全員そろって山住大宮司に本日の修行の安全を祈願し、河内浦のアカクボ沢から修験道に入る。古い鳥居がある。全員一礼後、入山。

何度か沢を渡り返すと清滝に出会う。「面影のうつる鏡の滝なれば姿形を、すぐにながむる」と古人にうたわれた。水に映る自分の煩惱を滝に見透かされていると言う自然に対する畏敬の念を感じる和歌である。

まもなくケアキの大木が忽然と姿を現す。少なくとも1000年以上は経っているであろうケアキは竜のように天に向かって枝をくねらせ、素晴らしいと言うよりは恐ろしい。

ここから急登。ざらざらと崩れる山の斜面をよじ登る。蛭が追ってくる。逃げる。払う。木の根にしがみつく。

やっとたどり着く『袖すり岩』。「いたづらに袖をばすりな、世の中に人の心

のあさぎそめてよ」と古人が読む。見上げる『袖すり岩』の大きさと冷静さ、そして急登後、息も切れ切れの我々の、なんとちっぽけな事か！

袖すり岩を通過すると今度は急降下である。今回のリーダーでもあり行者でもある中村氏がザイルを出す。大岩の崖側に『山姥押手岩』があると言う。「落ちたら間違いなく頭蓋骨が割れる。」と忠告され緊張しながら斜面をくだり、大岩を回りこむ。岩にくっきりと山姥の手の跡。絶壁の下から吹き上げてくる風は罪を払い落としてくれると言う。

続く『鐘掛岩』『胎内くぐり』。胎内くぐりは枯木に遮られて通過できず、岩の横をトラバースする。精霊を宿す奇石の数々に、時折アカヤシオが寄り添っている。

さらに『二子石』を経てやせ尾根を延々とのぼる。尾根を登ると言うより垂直壁に取り付いているといった表現の方がふさわしい。腐っている木や浮石が多く細心の注意が必要だ。「腐っている木と抱き合ったまま転落した行者もいるんですよ。だから、決して慌てないこと。修験道を歩くと言う事は一步一步踏みしめながら、自然のエネルギーをもらおうと言う事ですから。」と中村氏。確かな木の根か岩か、手で触れて確認してから体重をかける。足がすくむので下は見ない。ただ、上に行く事だけを考える。今、どの手がかりが確かなものなのかだけを見極める。只、今を生きる。まさに禅。

やがて少し尾根が緩やかになり、まともに2本足で歩けるようになったと胸をなでおろした瞬間、目前に光の扉が開かれたかのように『高天原』が飛び込んできた。暫し出会うことのなかった平地に緑のジュータンを敷き詰めたようなバイケイ草の群生。思わず立ち尽くす。目を凝らすと小さい鳥居の奥に天寿山常光神を祭る奥宮、山住神社拝殿が見える。行場の最終地点である。

安心感と共に軽くなる身体。不思議と疲労感はない。気がつけば、山は淡い春の色に染まり、新しい生命の息吹に満ち満ちている。